

常光寺々報

2017/9

秋季彼岸会法要

九月二十四日(日)朝十時半〜十二時

昼一時半〜四時

京都女子大学名誉教授

本願寺勸学寮頭

ご講師 徳永 道雄 先生

小さきは 小さきままに

花咲けり

野辺の小草の

安けきをみよ

(高田 保馬)

十月の法座

光輪法座

三日(火)昼一時半〜

やすらぎ法座

二十三日(月)十時〜

徳永先生には、本願寺の勸学寮頭

という大変な要職にありながら、いつも快くご出講をいただいております。毎年お出でいただいております。でも、しかし、めったにないご縁です。どうぞ、このご縁を大切にされて、ご聴聞くださいますようご案内申し上げます。今年は標記のように一日だけですが、朝も昼も一日ゆっくりお参りください。

還暦の友

ある人が金ヶ森の善従に、「この頃は、あなたもさぞかし退屈でつまらないことでしょう」といったところ、善従は、「わたしは八十を超えるこの年まで、退屈と感じたことはありません。というのも、弥陀のご恩のありがたさを思い、ご和讃やお聖教などを拝読していますので、心は晴ればれと楽しく、尊さでいっぱいです。だから、少しも退屈ということがな

いのです」と言ったといえます。

善従は蓮如上人の門弟ですが、私たちも善従さんを見習って、退屈することのない人生を生き抜きたいものです。十月から、還暦を過ぎた仲間の会を始めます。飲みながら、食べながら、人生を語る会、仏法を語ろう会です。

初参式

十一月三日(祝)朝十時半

やよ わが子 汝はいづちの
旅をへて われを父とは

生まれきませり

作家の吉川英治さんは、わが子の誕生をこのように深く喜ばれました。

仏法は、人間に生まれることは希なことだと教えます。そんな中を、この子はどうして私を父として生まれてきてくれたのだろうか……。そんな感謝の心が「初参式」です。

参加希望者は電話でお尋ねください

左に紹介するのは、七月一日号の本願寺新報に掲載された徳永先生の「ご法話です。味読ください。」

十方微塵世界の

念仏の衆生をみそなはし

攝取してすてざれば

阿弥陀となづけたてまつる

まず他者を思う心

もう何年も前のことになるが、ある全国紙の投書欄に投稿された文章があった。

その人は五十歳代の女性で、重い病で死の床にあったお母さんを弟さんと交代で看っていたという。夜もお母さんの横に簡易ベッドを置いて仮眠していたが、昼間は仕事をもつ身だから、その疲れでつい眠り込んでしまった。

ふと気がつくと、ズリ落ちた自分の毛布を掛けなおしてくれる人がいる。誰かと思ったら、そのお母さんがベッドから身を乗り出してそうしてくれていたとい

うのである。

それがわかってその女性は眠っているふりを装いながら、毛布の下で声を殺して泣いたという。死の床にあってさえ、わが子のことを思わずにはいられない。そんな母の心をその女性は生涯忘れることはないにちがいない。

自分のことより先に、まず他者のことを思う心を仏教では「慈悲」という。母の慈悲は人間のもつことのできる最も崇高な心だといえようが、わが子にだけしか及ばない。これに対して阿弥陀さまの慈悲は、一切の衆生にはたらく広大無辺のものであって、それが浄土の救いの根本である。

『観無量寿経』に、

仏心といふは、大慈悲これなり。無縁の慈をもつてもろもろの衆生を撰したまふ

とあるように、「無縁の慈」すなわち無条件にはたらくということである。した

がって、世に言う「縁なき衆生は度しがたし」などとは別次元の救いであるといわなければならぬ。

逃げる私を追う

冒頭の和讃は『浄土和讃』の「弥陀経讃」にうたわれ、その国宝本には、よく知られたご左訓（原文は片仮名）が施されている。すなわち三行目の「攝取」という語に、

せふはおさめとる

しゆはむかえとる

とその語意を施したうえで、

ひとたびとりてながくすてぬなり せ

ふはもののにぐるをおわえとるなり

と、阿弥陀さまの大悲の救いの何であるかを明らかにしておられるのである。

先の『観無量寿経』のご文によれば、阿弥陀さまの大悲は「無縁」の衆生を救うというはたらきをもつが、それはまたひとたび、その大悲に遇えば「逃げ場がない」ということにほかならない。